

開拓集落のコミュニティ

——名蔵・嵩田共同墓地めぐる生活環境史から——

日本学術振興会 廣本由香

本報告の目的は、沖縄・石垣島の中央に位置する嵩田地区の生活環境史的記述を通して、コミュニティを実践の視点から説明することである。本研究では、コミュニティを歴史的・社会的に構築される状況の産物であり、常に変化している実践の活動領域として捉える（平井編 2012）。

日本最西端に位置する八重山諸島は、国や地域の境界を越えてヒト・モノ・コトが行き交う島嶼群として「合衆国」（三木 2010）と称されてきた。八重山の政治・経済・交通の中核を担うのが、面積 222.24[?]・人口 47,564 人の石垣島である。石垣島中部にある嵩田は、字ではなく公民館を主体とする、68 世帯 140 人の小さなコミュニティである（『統計いしがき』平成 29 年度 第 40 号）。嵩田は、戦後に台湾人や沖縄県内の自由移民によって形成された開拓集落である。嵩田では、台湾人の半ば強制的な移住と開墾からはじまり、パイン産業の衰退による人口流出、ごみ焼却炉建設問題など、コミュニティの問題としてだけでなく、石垣社会全体の社会的課題の解決に向けて実践を繰り返してきた。現在は、政治によって一方的に進められる陸上自衛隊配備問題と対峙し、公民館として配備反対を表明している。このような歴史的・社会的な過程で、コミュニティは「弱者の武器」（松田 2009: 116）として一つの役割を果たしてきた。

本報告では具体的な事例として、1980 年代半ばの土地改良事業に関連した名蔵・嵩田共同墓地造成を取り上げ、共同墓地がコミュニティにとってどのような役割を果たし、コミュニティと人びとの関係にどのような影響を及ぼしたのかを分析する。沖縄研究において系譜や親族と結びついた祖先祭祀、葬制、墓制を対象にした民俗学的・人類学的な研究の蓄積は厚い。その一方で、沖縄研究に対しては「沖縄内部の差異化・構造化の観点から切り込む研究の圧倒的な不足」（安藤 2013: 301）が課題として上げられてきた。近年では、墓に関しても「移動しない人々」を対象にした「伝統社会」が意図的にフィールドとして選択されてきたことが指摘され、祖先祭祀や墓制の研究に都市と移動の視点を取り込んだ、新たな枠組みが示されている（越智 2018）。

本報告は、伝統社会の祖先祭祀の視点からではなく、開拓集落の実践という視点から地域の共同墓地造成の事例を読み解く。例えば、墓地造成期成会の代表を務めた A さんは、共同墓地について、嵩田で生まれ育った移民 2 世 3 世の共通項（ふるさとやアイデンティティ）の創出という観点から語る（2019 年 3 月 29 日、聞き取り調査）。本報告では、こうした共同墓地に関する生活環境史的記述から、「交渉」を特徴とするコミュニティについて考察する。

参考文献

- 安藤由美, 2013, 「テーマ別研究動向（沖縄）」『社会学評論』64(2): 294-305.
平井京之介編, 2012, 『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』京都大学学術出版会.
松田素二, 2009, 『日常人類学宣言！——生活世界の深層へ/から』世界思想社.
三木健, 2010, 『「八重山合衆国」の系譜』南山舎.
越智郁乃, 2018, 『動く墓——沖縄の都市移住者と祖先祭祀』森話社.